日加協会●エッセイコンテスト選外佳作

鍋田さんのこと

埼玉県草加市●橘　明美

私とカナダとの出会いは、少女期のロマンチックな幻想の中にあった。ルーシー・モンゴメリーの「赤毛のアン」を通して、カナダという国が初めて認識されたのである。ちょうど中学生の頃であった。

ガーデン・アイランドと呼ばれる、プリンス・エドワード島の美しい自然描写が、今でもすぐ頭の中によみがえってくる。マーク・トウェインやミッチェル、オルコットなどの描く、アメリカ合衆国とはなんとなく色あいのちがうカナダという国に興味をひかれたのである。

高校に入って、授業で習ったカナダは、地理的側面が重視され（たとえば、気候は冷帯で、農業は小麦生産、地下資源が豊富で面積の割に人口は少ない、など）、歴史ではカナダはほとんどといってよいほど出てこなかった。というわけで、私のカナダに対するイメージは、相変わらず「森と湖の国」でしかなかった。

大学に入って、なにげなく古本屋で買ったライフ社の「カナダ」という本を読み、私はカナダに歴史があること（あたり前のことであるが）を、初めて知ったのである。つまり今までの地理的イメージに加えて、新しいカナダを知ったことになる。史学を専攻していた私は、卒業論文のテーマにカナダを選ぶことにした。

それにしても、どの歴史書を見ても、アメリカ史はかなりのページをさいて書かれているのに対し、カナダ史はほんのちょっと。このことが、私をあえて冒険にかりたてたのかもしれない、と、えらそうなことを言っても、さて実際にカナダ史を勉強するにはどうすればよいのか。まずは本探しからと思い立ち、大学の書庫をくまなくさがした結果が収穫ゼロ。それではと、カナダ大使館に聞いたら何か教えてくれるかもしれないと思い連絡したところ、歴史関係の本の目録を送ってくれた。それを頼りに丸善を通じて注文したが、なかなか手元に届かない。

一応、カナダ首相であったマッケンジー・キングについて勉強してみたいと、焦点をしぼりつつあった私は、資料がなかなか集まらないことに少々のいらだちを覚えていた。

こんな時、私はある方とお会いする機会を得た。鍋田松一さんという日系カナダ移民である。今、鍋田さんからいただいた航空便を読み返しながら、六年前の初めての出会いを思い出している。あれは私が大学二年の春休みのことであった。四月のある暖かな日、鍋田さん御夫妻が、墓参りのためにカナダから帰国されていることを、私は知った。たまたま、私の母が、鍋田さんの奥様の妹さんを知っていたという関係で、ともかくも、カナダのお話ならなんでもいいから聞きたかった私は、渡りに船とばかり、おしかけたわけである。ひばりの鳴く麦畑を前にした縁側で、鍋田さんは、六十六、七才であろうか、若々しいシャツを着て、背が高かった。鍋田さんはカナダを「キャナダ」と発音した。ああカナダは「キャナダ」なんだ、という妙なおどろきが私にあった。

「キャナダではね、小川へつりに行くと、ダックがそばによってくるんですよ、ちょっと郊外に行けばすぐ大自然がありますからね」とか「私のボーイたちは、みんな夏休みにアルバイトをして、一人はアフリカを旅行し、もう一人のボーイは、トロント大学の法学部を卒業したあとまた医学部に入り直しましてね」――とこんなことを話されたのを覚えている。

その時、私は、実はカナダ史、特にマッケンジー・キングに興味をもっているが、マッケンジー・キングについて御存知のことがあれば、お話しいただきたいと、鍋田さんにお願いした。鍋田さんは、一瞬言葉をつまらせ、あまり多くを語られなかった。そのことを、私は別に気にもとめなかったのであるが、カナダ史を少々かじった今になって思えば、なんとぶしつけな質問をしたものかと反省せざるをえない。太平洋戦争前の排日運動、また太平洋戦争に突入した一九四一年のブリティッシュ・コロンビアからの日系移民の強制移住。その当時の首相が、マッケンジー・キングではないか。鍋田さんはその時、このことについて何も言われなかったが、その当時の御苦労を思い出されていたにちがいないのである。

一応いろいろなことを、おうかがいしたあとで、鍋田さんは「では、お互いの住所をメモして、また何かあったら連絡下さい。私の方もカナダに帰ってから本など調べてみましょう」と言われ、せっかくたずねてこられたのだからと、カナダのコインとブリティッシュ・コロンビアとオンタリオの地図を私にゆずって下さった。

春休みあけの大学生活にもどって、一か月半くらいたった頃であろうか、私はカナダから小包を受けとった。鍋田さんがマッケンジー・キングの伝記と、カナダ史の概説書を送って下さったのである。一緒に入っていたお手紙には、「向学心に燃える日本の若い人のお役に立つのが、老後をくらしている私たちの役目であり、また何かお役に立てることがありましたらいつでも御連絡下さい」というような意味のことが書かれてあった。私は感激した。正直言って、確かに住所をお知らせはしたが、まさか、ちゃんと送って下さるとはとても信じられなかったのである。

それ以後、大学を卒業するまでの二年余り、鍋田さんの御好意に甘えて、二、三度資料を送っていただいた。マッケンジー・キングの著書を図書館で借り出し